



即
随
ち
ら
!
白
玉
楼

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

目次

【催眠凌辱。ふたなり化】 P 4
【幽々子。パイズリご褒美ザーメン】 P 21
【妖夢。おチンポオナニー】 P 38
【完全屈服。チンポとマンコで味わう快樂】 P 58
【奥付】 P 78

【催眠凌辱。ふたなり化】

夏の朝、着物の袖をはためかせて桃色髪の少女がそつと庭へと降りた。

靴底が小石を踏み、枯れた音を響かせる。早朝の優しい日差しを浴びて青い着物がキラキラと輝いている。

幽々子がそつと手を差し出すと、それに応えるように一陣の風が吹き、木の葉たちが彼女の傍を舞っていく。それはまるで一つの浮世絵のような現実離れた光景だった。

西行寺幽々子。この白玉楼の主である。

白玉楼は迷える魂が住まう冥界の館である。その主である幽々子もまた人ならざる幽霊であった。

そして、その美しさも人間離れしていた。体型を隠す着物を着てなおその胸元は豊満に膨らんでいる。尻も豊かな曲線を描き、布地から浮かび上がるその形はまるで巨大な桃だ。袖口から見える手もわずかに覗く足も肉付きよく、抱きしめれば羽毛布団のごとし心地よさを約束してくれるだろう。

巨乳で巨尻で童顔で美白の肌。まさしく男を誘惑する艶姿と言えよう。

「妖夢ちゃんまだかな。早く朝市の新鮮なご飯が食べたいわあ。炊き立てご飯にお味噌汁にお魚に……じゅるり」

そんな美少女の口から出てきたのは食欲丸出しのセリフだ

った。ゆるんだ口からは涎まで出ている。それが下品に見えないのだから美少女とは得なものである。

「話には聞いていたけど面白い子だね幽々子ちゃん。身体もムチムチで抱き心地よさそうだし、これは確保かな。大丈夫、僕の奴隷になったらチンポをお腹いっぱい食べさせてあげるからね」

観察を終えた拓郎は軽く挨拶を交えて庭へと踏み出した。幽々子の表情が一瞬静止し、ゆっくりと振り返る。

「誰かしら？　ここは生きている人は侵入禁止よ」

ぼつぼつと幽々子の周囲に青白い鬼火が灯る。ただの火の玉ではない。触れるだけで生命活動の全てを停止させる『死』そのものの炎だ。

『死を操る程度の能力』

冥界の主たる幽々子が持つ絶対殺害の能力だ。生者ならば何人も逆らうことのできない死への誘い。彼女の吐息を受けた者は誰であろうと等しく死に絶え、幽々子の支配下に置かれてしまう。

いきなり殺しに来るか。拓郎は苦笑する。流石は妖怪、知らぬ侵入者に容赦は一切ないらしい。そしてそんな女だからこそ、圧倒的力で屈服させた時の達成感と快感は一層なのだ。

「はい。それ禁止ね」

ぱちんっ！

拓郎が指を鳴らせば鬼火たちは煙のように霧散した。幽々子の顔に「あり得ない」という動揺が浮かぶ。しかしそれも水面の波紋のように一瞬消えた。

「へえ。伊達に大妖怪じゃないなあ。大抵の子なら今のでビビっちゃうのに」

遠慮なく舌なめずりをして拓郎は幽々子へとさらに一步近づく。表情こそ変わらないが、幽々子の身体から警戒と緊張の気配が色濃くなった。

「何を驚いているのかな？ 幽々子ちゃんが自分で消したんだよ？ 僕の催眠の力でね」

催眠。拓郎が持つ絶対的な能力だ。わずかな合図で人間妖怪関係なくその身も心も支配できる。

この力と自身の肉体を使い、拓郎は何十人もの雌妖怪を奴隷へと墮としてきた。既に幽々子の魂深くに拓郎の毒牙は突き刺さった。もう、そこから逃げ出す術はない。

「……あら、ネタばらしをしているのかしら？ 手品師はタネも仕掛けもないものでしょう？」

「大丈夫。もう君は僕の言うなりだからね。試しに一つ命令してみようか？ 『幽々子ちゃんは着物をはだけて爆乳おっぱいを僕に見せます』」

「っ！？」（これは）

困惑に眉を寄せる幽々子に反して、その身体は滑らかな動きで着物を緩めていく。普段彼女がやっているであろう仕草で帯を緩め、拓郎に見せつけるように胸を張るとその両手が襟を開いた。

ぷるんっ！

青い着物の胸元を開いた瞬間、豊満な乳房が飛び出した。形はいわゆる半球型おっぱい。真っ白な肌色と相まって特大の肉まんが二つ乗せられているようだ。

「ほらほら、自分で寄せてみせてよ。男に媚びるように谷間を作って」

「う、くっ、そんな……本当に逆らえない」

言われるがままに、幽々子は自分の手で乳房を持ち上げて腕で寄せてしまった。乳首が尖り、むにゅつと腕の間から飛び出す。ただでさえ大振りな幽々子の乳房は、強調されて信じられないほどの巨峰となっていた。

「すごいポリウムだね。僕の奴隷の中でもこれほどの子はなかなかいないよ？ これなら僕のも挟めるかな？ デカチンも女の子を鳴かせるにはいいんだけど、受け止められる子が少なくてね。どれどれ、ハリはどうかな？」

「くっ……あん」

まったくの遠慮なく、拓郎は節くれた指で乳房を握ってやる。それだけで幽々子はビクッと背筋を伸ばして全身を震わ

した。根が淫乱な女特有の反応だ。この感じなら乳首でも存分にオナニーをしているはずだ。

そして乳房の感触も絶品だ。まるでクリームのような肌触りと柔らかさ。それがメロンのような重量と大きさとぶら下がっているのだ。男ならば誰でも食いついてしまっただろう。

「へえ、やつぱり体温は低いんだ。冷やした団子みたいで気持ち良いね。しかし、この大きさとこのハリと柔らかさ！ 谷間もこんなにたっぷりで、乳首も大きくてエロいなあ。これは食いでがありそうだ」

味を吟味するように拓郎は細かに指を動かし乳房を弄ぶ。

単純に揉んでいたのも束の間、乳首を指間に挟んで円を描くように動かし始めた。

「んくう……ふっ」

「我慢しないでいいよ？ 五百年もご無沙汰なんでしょ？ 妖怪なんてみんなチンポ欲しくて溜まらない欲求不満の雌なんだからさ。素直になりなよ」

頬をヒクつかせながら声を殺す幽々子に囁き、拓郎はその舌で顔を舐め上げてやった。

さらにおっぱいを焦らすようにささやかな揉み方を続け、不意に胸を強く握り膨らんだ乳首を指先で弾いてやれば幽々子はビクビクと身体を反らせた。

「玩具みたいに身体が跳ねちゃったね。僕の指がそんなに良

かったのかな？」

胸の谷間に顔を埋めながら拓郎は顔を緩めながら幽々子を見上げてやる。

「……そうね。お上手だと思うわ。こんな状況じゃなかったら惚れちゃっていたかも」

強がりな微笑みをする幽々子に、拓郎はますます笑みを深める。

「いいねいいねえ。その見透かしたみたいいな態度。女を犯すときはこうじゃなきゃね。じゃあ幽々子ちゃん、壊れちゃおうか」

ぱんっ！

拓郎は幽々子の目の前で両手を合わせる。乾いた破裂音が響いたと同時に、拓郎はその魂に新たな命令を叩き込む。

「幽々子ちゃんはずーメンをおマンゴこつくんするのが大好きな変態です」

「——っ！ あ、あふう！ んくうっ！ か、身体、燃えるみたいに熱いっ！」

幽々子の顔が淫猥な朱に染まる。荒くなる呼吸、うっすらと滲みだす甘い汗。乳房は一瞬にしてハリと大きさを増し、乳首が野イチゴのようなサイズに膨らんだ。

確かめるまでもない発情状態。

身体の全てが受精準備ができたと訴え、ムンムンとした雌

ら手マンと共に揺れる様はまさに絶景だ。ぷっくりと尖った乳首によだれが出る。それを眺めながら恥穴を弄ってやれば艶めかしい演奏が聞こえて来る。

「ほらほら、みつともなくイっちゃえ！ 指でマンコ痙攣させるんだ！」

臍内を削り出すような猛烈な指ピストン。指先は的確に幽々子の弱点を狙い撃ち、愛液がぐちゅぐちゅと音を立てて白く泡立つ。

「ひ、ひゃああああああああああああっ！」

悲鳴とも歓声ともつかない声と共に幽々子はガクガクと膝を震わせた。指の隙間から熱い飛沫が上がる。

「はいアクメ一回目く。おしっこみたいな潮噴いちゃったね。あーあー、アへ顔しちゃって『ご主人様の指気持ちいい♪』って顔してる。もうこの快感からは逃げられないよ〜」

顔に飛んできた甘酸っぱい汁を舐め取りながら、拓郎は幽々子の顎を掴み上げた。瞳は半分白目を剥き、半開きの口からだらしなく舌を垂らしている。先ほどまでの達観した雰囲気はそこにはなく、完全に雌イキした蕩け顔となっている。「それじゃあ、幽々子ちゃんの大く好きな極太チンポでトロトロおマンコを墮としてあげるね。ご主人様の味をしっかり覚えるんだよ」

「あ、あううう」

余韻に耽る幽々子の腕を掴み、拓郎は白玉楼の畳へとその身体を転がした。そのまま帯紐を解いてやれば包みを開くように幽々子の全てが露わになる。ふっくらと柔肉を付けながらもくびれを失わない腰回り、むっちりとしながらも健康的な太もも。立派な乳房は仰向けになっても形が崩れず、まるで雄を待つように左右に流れていく。

「ほら、見てごらん。これが幽々子ちゃんのご主人様だ」

「あ、あ、そ、それえ！」

袴から取り出されたイチモツを見た瞬間、幽々子の目の色が変わった。

まるで三本目の腕。

優に三十センチを超えるサイズは生殖器という常識を覆すような巨大さだ。それでいながら中に鉄芯でも通っているかのようにピンピンにそそり立っている。色は濃厚な赤黒で、見るからに性欲を持って余していると見せつけて来る。カリ首も金属のように張り、ゴムのように艶やかな亀頭は既に先走りで濡れていた。

「どう？ 僕の自慢のお・チン・ポ♪ これが今日から幽々子ちゃんの旦那様になるんだ。ほら、よく見て。臭い嗅いで」

拓郎は幽々子を跨ぎ、その顔に股間を擦り付けてやった。それだけで催眠奴隷は鼻をヒクつかせ、クスリでも打ったかのように目の前の生殖器に釘付けとなる。

拓郎は幽々子の足を持ち上げ、膝を自身の肩へと乗せた。自然幽々子の身体は二つ折りのようになり、お尻の上に拓郎の身体が覆いかぶさる姿勢となる。いわゆる屈曲位。

拓郎たちはこれを『種付けプレス』と呼んでいる。

「目の前の巨乳を見ながらチンポを入れるこの感触。たまらないね。幽々子ちゃんののだらしないアクメ顔も丸見えだ」

気まぐれに乳房を握ってやれば、膣壁はきゅんと喜びに締め付ける。拓郎はそのまま乳首をつねり上げ、強く上へと引っ張り上げる。

「い、いひひひひひひいんっ！」

「うわ、ずっしり重たいな。こんなのぶら下げて生活するんだから女の子も大変だね。ま、僕には関係ないけど。さあ、幽々子ちゃんが大好きなザーメン、たっぷり子宮ごっくんさせてあげるよ！」

「ふ、深いひひひひひいっ！　しょ、しょこおおお！」

腰を強く押し付けてやれば呂律の回らない嬌声が返って来る。特に声が高くなるのは最奥の子宮口に触れた時だ。

「ここを責められるのは初めてかな？　幽々子ちゃんのお相手は全員短小だったみたいだね」

ずじゅっ！　ずぶっ！　ぐぶっ！　ばんばんばんっ！
体勢が変わったことにより、肉棒はより深く幽々子の中に

攻め入る。子宮口をががつと突かれ、幽々子は獣のような悲鳴を上げていた。

激しく上下する肉棒は幽々子の中を削り出し、白濁した愛液を掘り返す。量はお漏らしでもしたようなシミができ、むせ返るような雌芳香が漂っている。

「おお、膣全部が僕を抱きしめて来る。流石は白玉楼の主サマ、おマンコも優秀だ。さて、そろそろ一発出してあげよう。焦らされて幽々子ちゃんも限界みたいだし」

ほっほっほっ、と汽車のような熱い吐息をつく幽々子は狂ったように下半身を震わせていた。ただでさえ催眠で敏感にされた身体だ。そこに大好物の肉棒を入れられて頭の中がぐちゃぐちゃになっているのだ。このままピストン責めだけを続けたら本当に壊れてしまうだろう。

「それじゃちよつと本気で責めてあげるね。子宮を開けて受精準備するんだよ？」

「噢！　奥にひひひひいっ！」

「わかってるよ。一番奥だね。おらっ、食らえ！」

「い、つはあああああああああああああつ！」

びゅぐっ！　どびゆるうっ！　ぶびゅぶびゅうっ！

間欠泉のような勢いで巨大肉棒から白濁液が噴き出した。子宮奥へと注ぎ込まれる熱液に幽々子は足をピンと伸ばして歯を食いしげる。

「おっほ。出る出る。くう、チンポの先が雌肉とザーメンで
温められる感触、最高！」

ぶびゅっ！

接合部の隙間からも収まり切れなかった精子が噴き出した。
最後にぐりぐりと子宮に亀頭を擦り付け、拓郎は念入りに膣
を精液を塗り付けた。

「は、はへええええ……」

「ははっ、子宮が痙攣してザーメン飲み干してるよ。半分失
神しているのにまだ吸い付いて来るなんて、本当淫乱だな。
これでもう幽々子ちゃんは僕の物だね」
チャキ。

さらに追加の精液を注ぎ込もうとした時、拓郎の肩口に銀
の刃が乗せられた。

「あらま、お早いお帰りだね。妖夢ちゃん」

振り返った先には白髪の少女が鬼の形相で睨んでいた。

魂魄妖夢。

白玉楼の庭師という触れ込みだが、実際には幽々子の世話
係に近い関係らしい。半人半霊という珍しい種族らしく、愛
らしい白髪少女の姿も、その隣に浮く人魂の姿もどちらも妖
夢であるとのことだ。

どうやら朝市の帰りらしく縁側には買い物袋が投げ出され
ていた。帰宅したその足で幽々子の交尾姿を目撃してしまっ

たらしい。

「幽々子様から離れなさい」

「怖いなあ。刀を向けられちゃ身動き取れないよ。まずは落
ち着いて。お茶でも飲む？」

「離れる！ この色情魔——」

「はいはい。幽々子ちゃんもアへってるし、妖夢ちゃんの相
手をしてあげるよ。さ、催眠にかかろうね」
パンッ。

今にも唾み付かんばかりだった妖夢は、手を叩いた音一つ
で動きを止めた。怒りに釣り上がっていた眉が困惑に至み、
さらに切なそうに寄せられていく。

「妖夢ちゃんは男に触れられるだけで発情する敏感体質で
す」妖夢ちゃんは巨大チンポで突き上げられるのが大好きな
淫乱娘です。とりあえずこんなところでいいかな」

「な、なにこれ？ か、身体の奥から何かが……うくう！」
あつという間に瞳が潤み、太ももをすり合わせ始めた妖夢。
さらに拓郎が力の抜けた手を取り、顔を見つめてやれば白い
肌が茹で上がったように赤く染まっていく。

「あれ？ その反応、もしかして妖夢ちゃんっていったこと
もない？ どう見ても処女だとは思ってたけどこれは嬉しい
誤算だな。それじゃ人生初めてのアクメ、いっっちゃおうか！」
「さ、触らないで……あひゅううううっ！」

手を振りほどこうとする妖夢を抑え、拓郎は股間を思い切り鷲掴みにした。それだけで妖夢はがくと腰を震わせ、手の平に熱い汁を噴き付けて来る。

「あ、あひっ、ひっ！ な、何今の……うつくっ！」

「はは、これがイクってことだよ。女の子が一番幸せな瞬間だね。この味をしつかり覚えて僕に見つめられるだけでイクようになるんだよ？ さてと、刀は没収ね」

絶頂と共に緩んだ手から刀をあつさり奪い取る。妖夢の体温が残る柄を握り締め、拓郎は刃を一閃した。

「え？ あ、ひゃああん！」

ぱらりと妖夢のショーツが細切れになって落ちていく。露わになった白い割れ目に拓郎は口端を舐めた。

「妖夢ちゃんはパイパンか。エロイね。それに身体つきも幼い感じで背徳的だ。幽々子ちゃんのムツチり体型もいけどこういうお子様体型もまた違う感触で楽しめるんだよね」

ベストとスカートの下にあるのは幽々子とは正反対の幼児体型だ。肌は幽々子と同じ透き通るような白。その服を押し上げる胸の高さは実につつましく、手で余裕で包めてしまうだろう。股間部には毛一本なく、小柄なワレメはピタリと閉じていた。

それでいて、とろりとした愛液で下腹部を濡らす様子は、大人になりつつある■■の身体と言う希少な存在であること

をありありと教えてくれる。

「もうびしょびしょだ。妖夢ちゃんはもともと淫乱だったんだね。幽々子ちゃんほどじゃないけど体温は低めかな？ どれ、味はどうかな」

「な、何を……い、いふううううっ！」

スカートの中に顔を突つ込み、切れ目のような股間を舐めてやれば、妖夢は背中を反らして全身に鳥肌を立たせた。口の中におぼこ特有のしょっぱい味わいが広がる。

「う、嘘！ そ、そんな所、し、舌で舐め、舐めええ！」

「うはっ。おしっこ臭いね。男を知らない初心な味だ。ここもすぐにエッチな雌の味に調教してあげるからね」

拓郎は披裂の下から上までを一気に舐め上げた。皮の中に隠れていた豆を弾かれた妖夢は面白いほどに腰を震わせた。それを力づくで押さえつけながらディーブキスをするように陰唇に吸い付いてやる。

じゅるるるっ！ じゅぞ！

唾液塗れの大陰唇が細かく震え、いやらしい音を立てる。同時に口の中に流れ込む熱い蜜。小便臭い味わいはだいたい薄れ、発情した雌特有のチーズ臭が混じり出す。

「ん、んひい！ ま、また来ちゃうううう！ だ、だめ！ 今

されたら……ああああああっ！」

ヒクヒクツと膣口が震えた瞬間、拓郎は思い切りクリトリ

スに吸い付き唇で小さな豆を挟んでやった。

瞬間、熱い飛沫が上がり、幽々子の愛液で濡れていた畳に新たなシミを重ねた。

「本当に妖夢ちゃんはずっばいいね。お漏らしみたいに垂れ流して。さあそれじゃあ本格的な絶頂、いつてみようか」

拓郎は畳の上に腰を下ろすと、その股の上に妖夢を抱き寄せた。服越しにも背中が汗ばんでいるのがわかる。程よく冷やっこい体温と合わさり実に心地よい。そのまま臀部も股上を下ろすとびちゃりと濡れた音が響いて肌に吸い付いてきた。これ全部が愛液だと思っただけで腹から笑いが出る。

「ひっ！ あ、熱いのが……！」

背面座位の体勢で抱きしめつつ、拓郎は妖夢の股間に肉棒を擦り付けた。その長さは優に妖夢のへソを超え、胸下まで届いている。太さも妖夢の口よりもさらに大きい。ぬらぬらと朝陽に輝く肉槍に妖夢の顔が恐怖と嫌悪と期待に入り混じった感情のるつぼと化する。

「どうだい、幽々子ちゃんとおマンコした濡れチンポ。これが今から妖夢ちゃんの中に入るんだよ。記念すべき処女喪失をこんな立派なチンポでできるだから妖夢ちゃんは最高に運がいいね！ それじゃあずっばりいっっちゃおうか！」

「ひ、いぎ、うぐううっ！」

ぐぐっ！ ぐぐぐぐっ！

妖夢の太ももを掴み上げ、拓郎は幼い割れ目を無理矢理に押し広げる。みちみちと音を立てる恥肉。妖夢はがくがくと足を震わせながら巨大なイチモツを飲み込んでいく。

「お、これが妖夢ちゃんの処女膜か。妖夢ちゃんと同じで堅物だね。さあぶち抜くよ！」

「や、止め！ お、お腹破れちゃ……あああつ！」

ぶちいんっ！
肉を裂く音と共に肉槍が一気に子宮奥まで突き進んだ。先端が硬い肉にぶつかる感触に陰茎が震える。まだ男を受け入れたことのない肉穴は恐ろしく狭く、食いちぎるような強さで締め付けて来る。

「流石にかなりキツイね。ヒダの形までわかるくらいギチギチで。身体全部でチンポを締めるこの感覚は初物ならだよ。ああ、妖夢ちゃんの膈内、気持ちいい♪」

「か、かはあ……おひっ!? う、動かないでえ……こ、これだめ！ だめえええええ！」

ずじゅっ！ ぶちゅっ！ ぐちゅううっ！

背面座位で足を抱えられた妖夢は、まるで玩具のように身体を上下させられる。肉棒が最奥から抜ける直前まで引き抜かれ、再び最奥へと入っていくロングストローク。処女にはあまりに過酷な責めに妖夢は目を白黒させて叫び上げる。

「ははは、打ち上げられた魚みたいにビクビクしてるね。催眠

眠のおかげで痛くないでしょ？ 初めてのエッチでこんなに感じちゃったらもう普通の生活には戻れないよ。まあ戻すつもりなんてないけどね！」

「あ、あんっ！ ひゃ！ あああっ！ な、何んですかこれえ！ わ、私が……おかしひひいんっ！」

先ほどまで警戒と嫌悪に染まっていた妖夢の口から甘い声が漏れ始めた。肌は泥酔したように赤く染まり、手は赤ちゃんのように強く握り締められている。

アクメ経験すら浅い妖夢は快感を快感であるとすら認識できないのだ。そんな初々しい身体に女泣かせのイチモツを押し込むのは最高に心地よい。

「もうわけわかんないって顔だね。これがオトコトオンナの秘め事って奴だよ。さて、そろそろ一発出してこのおマンコをザーメン征服しちゃうよ。妖夢ちゃんの大好きな打ち上げピストン開始だ！」

「ふうああああああああああああああああっ！」

畳に寝そべった拓郎はそのまま妖夢の身体も後ろに反らせて、開脚ブリッジの体勢を取らせる。大きく広げられた足は股間を完全に露出させ、生殖器を受け入れさせる開花ポーズとなる。

そのまま拓郎は腰を跳ね上げるようにピストンを始めた。同年代の少女たちの中でも体重の軽い妖夢は、手毬のように

身体を弾ませて扱き袋となる。真っ赤に充血した秘所が軽くめくり上がり、チンポを抜き出し、自身の体重によって突き上げられる。

「あうっ！ はっ！ おっおひいひいっ！」
「ずじゅっ！ じゅばっ！ じゅっじゅくっ！」

まるで漏らしてしまったかのような大洪水。濡れに濡れた妖夢の秘部は巨根を受け入れるたびに激しい飛沫を上げ、股間と股間の間を熱く濡らしていく。

「ああ気持ちいい！ ちっちゃなマンコがぎゅんぎゅん締め付けて来る。それを無理矢理に出し入れするのは溜まんないね。妖夢ちゃんもだんだん良くなってきたでしょ？ おマンコが僕の形になってきた証拠だよ。すぐに幽々子ちゃんと同じようにひいひい叫びながら僕のチンポを欲しがるようになるからね！」

「そ、そんな……おほっ……や、やあ……んひい！ あ、やだあああはああああああああああっ！」

「嫌とか言っちゃって、もう腰を振り始めてるくせに。流石は騎乗位大好き淫乱妖夢ちゃん。上の口は文句言いながらも、下の口は正直だね♪」

妖夢の背中を眺める拓郎にはその腰が、自分の突き上げに合わせて弾んでいることがはつきりと見て取れていた。チンポを欲しがる女の腰付き。催眠によって妖夢はピッチ顔負け

の淫乱さで腰を振り、肉欲を貪っているのだ。

しかし妖夢本人は未だ生娘の表情で自体にひたすら困惑している。そのギャップが拓郎の股間をますます熱くする。

「そろそろ出すよ！ 妖夢ちゃんの中に初中出しだ！」

「だ、出す？ え、な、なに？ 中で大きく！」

「もちろん精子だよ。せーし。赤ちゃんの素っ裸で言えばわかるかな？ これで妖夢ちゃんもママになれるんだよ！」

「そ、そんな……だ、だめええ！ 止め、止めてえええ！」

「ははっ、なら腰を止めればいいじゃないか。ま、どっちにしろ孕むまで犯すけど。じゃ、ラストスパートだ！」

「あっひいいいいいいいいいいいいいい！」

「じゅぶっ！ じゅっ！ ぶちゅぶっ！」

妖夢の腰を掴んだ拓郎はそのまま嵐のような抽送を開始した。パチュパチュと愛液が弾ける音が館中に響き、膣の奥の奥をこれでもかと攻め立てる。

「ほらいけ！ イッチャえ！ 妖夢ちゃんの初めての受精をアクメで味わえ！」

「い、い、いくうううううううううううううううううう！」

「びゅぐっ！ びゆるううっ！ どびゅうううっ！」

噴水のような勢いで射精されたザーメンが幼い子宮に流れ込む。白い腹はぶくぶくと膨らみ、その凄まじい量を示している。

「あ、あくっ！ おっ！ と、止まらにゃいひい……！」

股関節を震わせ、射精の味を味わう妖夢。その脳内には人生最高の快楽としてこの瞬間が記録されているに違いない。白目を剥き、よだれを垂らすその顔には凜とした剣士の面影は残っていない。

「お、おっほおおおおおおおおおおおおっ！」

「ぶしっ！ ぶしゅっ！ ぶしゅあああっ！」

拓郎の肉棒が引き抜かれると共に膣口から白く淀んだ汁が飛び散る。

まるで水やりでもしているかのような激しい潮噴き。それに合わせて妖夢はガクガクと腰を震わせるものだから、部屋中に愛液が飛び散ってしまっている。ぷんつと香り立つ雌の臭い。畳に沁み込んだこの臭いは永遠に消えることはないだろう。

「妖夢ちゃんも完イキしちゃったね。でもまだまだやり足りないよね？ ねえ、幽々子ちゃん？」

「あひんっ！」

倒れていた幽々子の股間をまさぐり、拓郎は無理矢理にその意識を覚醒させた。もちろん拓郎の巨大なイチモツはたった二回の射精では収まっておらず、ビクビクと脈動しながらその硬さを取り戻し始めていた。

「準備運動も終わったし、そろそろ本気で責めてあげるよ！」

「ひ、ひいっ!」

剛直していく肉棒に幽々子が引き攀った声を上げる。

しかし催眠にかかった身体はその場から逃げ出すことすら許してくれない。

「とりあえず夕方まで休憩なしで犯しまくってあげるね。もちろん休憩なんか取らせないよ。イキ過ぎて頭パーにならないようがんばってね♪」



「ほ……おほ……ほひい……!!」

「はっ……はっ……はくう……!!」

「うーん、気持ちよかった。幽々子ちゃんに五発、妖夢ちゃんに四発かな? まあ二人は軽く三桁はイっちゃったみたいだけど!」

既に頂点を超えて傾きかけている日に向かい拓郎は満足げに背伸びした。背後では絶頂に絶頂を重ねた幽々子と妖夢が手足を投げ出して倒れている。その股間からは糊のように粘ついたザーメンがどろどろと流れ出ている。

「あーあー、おマンコがぱっくり開いて真っ赤に充血して。これぞ雌奴隷って感じだね。催眠で頭の中まで模様替えしちやの面白けれど、意識残すのもオツなんだよね」

「……っですか」

「ん?」

「こ、こんなことして楽しいですか? こんな無理矢理……汚らしい物を出して……この変態い!」

「驚いた。妖夢ちゃん、まだそんなことを言える気力が残ってたんだ。結構頑張り屋さんなんだね。えらいえらい」

必死に身体を支え立ち上がるうとする妖夢。その様に拓郎は大仰に驚いて見せ、その顔前にしゃがみ込む。

「それで楽しいか、だっけ? もちろん最高に楽しいし気持ちいいよ! 女の子を好き勝手に犯せるなんて最高じゃないか。チンポ持っているなら誰だって……」

そこでふと、拓郎の中に一つの着想が浮かび上がる。

「あ、そうだ。いいこと思いついちゃった。二人にもチンポの気持ちかわかる最高のアイデアだ」

「な、何を一体……」

あから警戒を示す妖夢。そんな彼女に向かい拓郎は指を鳴らした。

「ひっ! また身体が勝手に!」

「あくつ、よ、妖夢……何が?」

「せっかくだから外でしようか。少しは陽の光も浴びないと不健康だしね」

言いながら白玉楼の庭へと二人を誘導する拓郎。股間から

愛液と精液が垂れて、屋敷から庭までに二本の線を引く。

「それじゃあ、二人にも教えてあげるよ。チンポの気持ちよさをね♪ 『幽々子ちゃんと妖夢ちゃんは精液無限の玉付きチンポが映えた変態少女です』！」

ばんっ！

手を叩くと共に幽々子と妖夢の態度が一変する。諦観の表情で俯いていた幽々子はビクンと背を反らして驚愕に目を見開く。敵意に満ちた視線を向けていた妖夢はむず痒いように下半身を震わせ目を白黒させる。

「こ、股間が熱いっ！ あ、ああ妖夢！ 妖夢う！」

「あ、ああ！ ゆ、幽々子様！ あ、あそこが痒い！」

「すごいね。クリトリスがどんどん大きくなってる。ほら見てごらんよ、もう親指サイズを超えたよ。お、先っぽが割れて尿道になった。玉も膨らんでエッチだね！ さあ、このままふたなり少女になっちゃえ！」

「あ、あ、ああああああああああああああつ！」

ぶるん！ ぶるるんっ！

まるで脱皮でもするかのように一気にクリトリスが膨張し、グロテスクな男性器へと変貌する。その下部にはしっかりと辜丸もぶら下がり、さっそく精子の生産に励んでいる。

「おお、初めてやってみただけ上手いくもんだね。おめでとう幽々子ちゃん妖夢ちゃん！ 元気なおチンポだよ！ こ

れで二人とも立派なふたなり少女だね！」

「嘘、嘘よ。こんな、男の人のが生えるなんて……」

「こ、こんな身体……私、もう外を歩けない……」

自らの股間に誕生したグロテスクな男性器を、二人は信じられないといった表情で見つめていた。瞳には涙が浮かび、嫌悪とも絶望ともつかない表情で眉を寄せている。

それをしげしげと観察しながら、拓郎は二人の背後に回り込む。

「それにしても同じ催眠かけたのに、全然形が違うね。幽々子ちゃんは太くて長い巨チンだね。玉もおっぱいと同じで大きくてまるでけん玉みたい。うちの仲間にもこのサイズはなかなかいないなあ。ま、僕には負けるけどね♪」

「ひやあつ！ さ、触らないでえ！」

幽々子のイチモツはまるで大根のような巨根であった。拓郎の手でも指が完全に回らず、その太さを伺わせる。皮こそ被っているものの、カリもかく張り、逞しい血管を浮かべせている。金玉も立派でずっしりとした重みで秘所と触れ合っている。

「妖夢ちゃんは包茎のチンポだね。手にすっぽり包み込めるミニサイズで可愛いな。玉もつるつるの童貞タマタマだ。そのくせ必死に勃起してる。早く大人になりたいんだね。わかるよ！」



「イ、イックウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

ぶびゅうっ!　びゆるるるるっ!　びびびびゅううっ!

二つの穴から白濁液が噴出する。その量は並みの男を遙かに超え、ワイングラスを逆さにしたような勢いであった。

さらに拓郎の扱きに呼応して二度三度と射精が続く。

まさに精液の双砲塔だ。

ようやく二人の射精が終わることには太い幹は白濁に塗れ、地面からもぷくんとイカ臭いニオイを放つようになっていた。

「二人とも精通おめでとう!　今日は赤飯と牛乳かな?　ザーメン濃度も高いし、量も多いしこれなら女の子相手でも満足させられるよ!　おや、どうしちゃったのかな二人とも。初めての射精が気持ち良過ぎて感動しちゃった?」

「はっ……はっ……はぁぁ……」

「ひっ……やっ……きふう……」

射精を終えた二人は白目を剥き、かくかくと腰を震わせていた。既に意識はないようで、体重を拓郎へと預けている。しかし一度萎えた股間はすぐさま勃起を取り戻し、次の射精のために精子を汲み上げている。

「あーあー、手淫一発でよがっっちゃって。まだまだ本番はこれからだよ。二人にびつたり催眠をかけて、チンポの気持ちよさをとことん教えてあげるからね!」

言い、拓郎は再び手を叩く。

「『幽々子ちゃん、僕は僕と妖夢ちゃんの精液しか美味いと感じられないザーメングルメです』妖夢ちゃんは絶対に射精できないオナ禁ふたなりチンポ娘です!」

その言葉が脳裏に沁みついたことを確認し、拓郎は二人から身を離す。重力に引かれるまま二人は白玉楼の庭へと倒れ込む。

「一週間後くらいが食べ頃かな?　それまで新品チンポの快感に存分に楽しんでね。地獄の日々だろうけど♪」
それだけ言い残し、拓郎は白玉楼を後にした。



続きは本編で！！